

三陸被災地で防災・減災教育を学ぶ

—岩手県宮古市から宮城県仙台市に至る 2017（平成 29）年度「地理学研究」の覚え書き—

香川 貴志

（京都教育大学）

Learning About the Education for Disaster Prevention and Reduction in the Sanriku Area Struck
by the 2011 Off the Pacific Coast of Tohoku Earthquake :
Memorandum of Field Trip from the City of Miyako to the City of Sendai

Takashi KAGAWA

2017 年 11 月 30 日受理

抄録：奇数年に前期集中で開講される「地理学研究」の今年度の訪問地は、2011 年東北地方太平洋沖地震による甚大な津波被害を受けた三陸地方の各地域である。まず宮古市田老地区では、田老第一中学校訪問と「たろう観光ホテル」を中心とした「学ぶ防災」プログラムでリアリティに富んだ体験ができた。また、宮古湾の湾奥の平野部に位置する宮古工業高等学校では、津波シミュレーターの実演を見学し、東日本大震災前から継続して実践されてきた防災・減災教育の真剣な取組に触れることができた。さらに、宮古から仙台まではエクステンシブ的に被災地を南下し、その惨状と力強い復興の姿を眼に焼き付けることができた。多くの児童や教職員が津波の犠牲となった旧大川小学校への慰霊訪問は、近い将来に教職に就くであろう学生たちが防災・減災教育の重要性を再認識する貴重な契機となった。

キーワード：2011 年東北地方太平洋沖地震、防災・減災教育、学ぶ防災、津波シミュレーター、三陸

I. はじめに—三陸被災地との縁とコース設計、受講者決定—

歴史的町並み保全と市街地再開発について飛騨市、高山市、富山市を巡った昨年の「地理学特講」では、現代社会で守るべき価値があるものと新しく創造していくべきものを現地で学ぶことができた（香川：2017a, 2017b, 2017c）。今年度は奇数年に開講される前期集中科目「地理学研究」において三陸被災地を訪問し、現地で被害と復興の状況を見聞するとともに、現地で展開されている防災・減災教育の一端に触れ、教職を志す受講生が将来活用できるよう体験的なコース設計をおこなった。目的が早期から決まっていたため、準備は 2016 年秋に着手し、2017 年早々には現地の協力者と緊密な連絡を取り始めた。

筆者が 2011 年東北地方太平洋沖地震の後に初めて被災地を訪問したのは翌年 2 月のことで、その際に教え子のご尊父で宮古市役所に勤務しておられた鈴木清次郎氏（現在は定年退職し自営業、以下では鈴木氏）からひとかたならぬ歓待と案内を受けた。鈴木氏はご自身が勤務中（宮古市役所津軽石出張所）に津波と遭遇しており、そのリアリティに富んだ回顧談は 2013 年 2 月に大学院の集中授業で現地を訪問した折にも披露いただいた（香川：2013）。震災当日の鈴木氏のご家族は全員が別の場所に居り、筆者の教え子でもある長女の清華氏は震災当時京都教育大学で事務補佐員をしていた。また、鈴木氏の奥様の美代子氏は宮古市内の重茂漁協、鈴木氏のご尊父の清一氏（故人=2016 年没）は津波で大きな被害を受けた自宅に滞在中だった。鈴木家の震災体験については香川（2016）に短文をしたためている。

上述の三陸訪問に加え、仙台での学会の折に足を延ばした陸前高田訪問、現在進めている科学研究費基金による調査訪問を含めると、今回の現地実習による筆者の三陸被災地訪問は今回の現地実習で 5 度目になる。とくに宮古市では鈴木氏を通じて多くの知り合いができたため、その人脈が今回の現地訪問では非常に役立ち、近年でも稀有なコース設計ができた。

対象地域が三陸地方全域に及ぶため、限られた 2 泊 3 日の日程で物見遊山的な行程になってしまうのを避ける

必要があった。しかし、ごく限られた地域だけを観察するのであれば津波被害の大きさを実感することができなくなってしまう。そこで、今回は受入体制が整っている宮古市で連泊し、そこを拠点として第1日目と第2日目に宮古市内で震災がどれほど甚大なものであったのか、また震災復興はいかに進んでいるのか、さらに被災地で防災・減災教育がどのように実践されているのかを学んだ。それとともに、津波被害の広域性を受講生に実感させるため、第3日目（最終日）の朝に宮古を借上げ大型バスで発って被災地を歴訪しつつ仙台に至るコースを設計した。第1日目と第2日目の主な訪問地は、宮古市内が田老（田老第一中学校、防潮堤、宮古市田老支所）と赤前（宮古工業高校）、途中の下車地点を含めた第3日目（最終日）の訪問地は、山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市、気仙沼市、南三陸町（志津川）、石巻市（大川小学校跡）、仙台市（若林区荒井）である。

集合と解散については、8月9日16時にJR宮古駅に現地集合、8月11日17時頃に仙台市営地下鉄東西線荒井駅で現地解散とした。数年前から前期終了が8月上旬にズレ込み、8月中旬から下旬早々に成績報告期限が設定されているため、現地実習の日程は2泊3日が精一杯である。また、前日まで前期試験がある学生も珍しくなく、当日の朝に京都を発っても到着できる時間に集合場所や時刻を設定する必要もある。今回は、少し早目に移動できる学生にとって、日光や平泉などに立ち寄ってから集合場所に来ることができる時間設定とした。

さて、今年度は当初31人の受講希望者が集まった。この数は受講可能人数の枠内だったので全員の受講を認めることができた。その後、私用で現地実習に来ることができなくなった2名のキャンセルがあり、最終的な受講者は同時開講の大学院「人文地理学特論」を含めて29名となった。内訳は、学部7回生：1名（男子）、学部4回生：1名（男子）、学部3回生：20名（男子14名、女子6名）、学部2回生：4名（男子4名）、大学院修士課程1回生：3名（教科教育専攻社会科教育専修＝男女各1名、教育学専攻教育学専修＝女子1名）である。

Ⅱ. 事前学習会—実施方法とその内容—

今回の本授業科目は、シラバス記載の時間配分から微調整して若干の変更を施した。現地実習が2泊3日で、第1日が1コマ（2時間、以下1コマあたり2時間）、第2日が5コマ、第3日は5コマからなる。そこで、現地実習の総時間数コマに対する不足分4コマを事前学習会で補填することとし、第1回事前学習会を5月20（土）に2コマ（4時間）、第2回事前学習会を7月15日（土）に2コマ（4時間）設定し、時間要件を満たした。

1. 第1回事前学習会（5月20日（土））

事前学習会は、昼食を摂ってから集合することをEメールで全受講生に連絡して12時半から始めた。無断欠席者に対しては、昨年度と同様に成績評価の際に減点することにした。しかし、こうした慣習が周知されてきたためか、今年度は無断欠席者が居なかった。

第1回事前学習会では、現地実習での旅程をタイムテーブルも付けて示し、それに基づいてコース概略を説明した。数年前から事前学習での恒例課題となっている文献研究は、筆者が5月3日にCiNiiで検索語の条件を付け、さらに論文刊行年や掲載ページ数の分量でセレクトした全79件の文献について、その要旨をまとめる担当者を割り振った。これに先立って、第1回事前学習会の数日前に全受講生へ宛てたEメールで「定められた論文カテゴリーにしたがって、要旨をまとめる担当論文（複数）を選択し、希望があれば香川研究室のドア横に掲示した『論文担当表』に氏名を記入すること」と案内した。

2. 第2回事前学習会（7月15日（土））

第1回事前学習会で担当を決めた論文について、各受講生には2日前の木曜深夜までに当該論文（複数）の要旨をテンプレートに書き込んで筆者のもとへ送信するよう命じた。その未調整前の要旨原稿を全てプリントアウトして人数分を複写し、第2回事前学習会の冒頭で配布した。各自が担当する論文は頁数に応じて4～6本であった。対象となった論文のフィールドは、訪問先が密度高く分布している田老地区のものを中心にして、最終日の借上げ大型バスによる訪問地を分散的にカバーして仙台市までの広域にわたる。うち、宮城県を主な対象地域として扱った震災時の学校教育に関する論文2編は全員に担当させた。

第1回事前学習会から敢えて2か月近くの間を設けたにもかかわらず、数名の者は附属図書館や地理学研究室

に所蔵されておらず無料ダウンロードもできない論文を収集できなかった。それが 10 本近くにも上ったことは、昨今の学生たちがもつ文献渉猟能力の著しい退化を象徴している。IR（機関リポジトリ）、DOI、J-STAGE の普及など、インターネットを介した無料ダウンロードの利便性が高まったのは喜ばしいことである。しかしその一方で、文献収集に対する食欲が急速に減衰しているのは由々しき問題である。

この日に配布と紹介ができなかった論文要旨は、テンプレートを使用せずに特殊なソフトで作成されたもの（当該ファイルが筆者の PC では開けなかった）、上記のように締切までに論文の取り寄せが間に合わなかったもの、最初にキャンセルした学生が担当する予定だった論文の要旨である（もう一人の学生は論文要旨を提出してからキャンセルした）。筆者は上で述べたような受講生が論文を集められないことも視野に入れて、彼ら/彼女らの担当論文を急きょ入手し、課題の追加提出を待つ間に論文の代読と要旨の代筆に励んだ。

受講生から提出された論文要旨にはかなりの巧拙があったため、筆者は全ての論文要旨を熟読して推敲を重ねた。このようにして現地実習に持ち込んで配布する資料集（地図や論文要旨を合冊）が整ったのは 8 月 3 日のことだった。この期日は、現地に科研費による調査研究で先乗りする筆者が 8 月 7 早朝に自宅を発つため、大学から現地宿舎に発送できるギリギリの日程だった。資料集への綴込みに間に合わなかった受講生の課題は遅延しても提出するよう指導した。この資料集に掲載した論文要旨については別稿（香川：2018a, 2018b）にまとめた。

Ⅲ. 現地実習の実施

1. 現地実習 1 日目（宮古市の天候：雨ときどき曇り，日中の最高気温：19.8℃（10:40））

本授業科目は、通例にしたがって現地集合とした。集合場所は JR 宮古駅で集合時間 16:00 である。集合時間が夕刻なのは京都を早朝に発って到着可能な時間を設定したためである。ただ、昨年の台風被害で盛岡からの JR 山田線が部分不通になっており、当日は盛岡・宮古間で「106 急行バス」を利用せざるを得なかった。このバスが少し延着したため、実質的な集合時間は 30 分ほど遅れた。この他、当日に台風の影響を受けて 17:00 着のバスで到着した学生が 2 名いた。この件については天候の影響なので遅刻の責任は問わなかった。なお、筆者は今回の実習に関わる資料収集や挨拶のため、前日に宮古入りして鈴木氏との打ち合わせも済ませていた。

上記 2 名の学生を除いたメンバーは、宿の送迎バスと鈴木氏の自家用車に分乗して投宿した。部屋割りの後、荷解きや入浴の時間を取って 18 時過ぎから鈴木氏による東日本大震災当日の様子のレクチャーを設定した。レクチャーの開始までの間、筆者は鈴木氏とともに氏の自家用車で延着した学生を宮古駅まで迎えに行った。

鈴木氏によるレクチャー（写真 1）では体験者だけが知る貴重な体験を聞くことができた。同氏は宮古市職員として教育委員会で防災・減災教育に携わっていた経験もあるため、今回の現地実習に深く関わる学校防災についても学べた。また、奥様が宮古市重茂漁業協同組合にお勤めのため、同組合がまとめた震災記録（重茂漁業協同組合：2016）の一端も紹介していただいた。レクチャーは 19 時半頃に終わり、一同で鈴木氏を見送った後で夕食の時間を迎え、その席で翌日の行動予定や注意点などを告げて第 1 日目の予定を終えた。



写真 1 鈴木清次郎氏による震災レクチャー

教育委員会での勤務経験がある鈴木氏の震災体験談は多くの教訓に富んでいた。（2017 年 8 月 9 日，筆者撮影）

2. 現地実習2日目（宮古市の天候：雨ときどき曇り，日中の最高気温：18.5℃（11:50, 13:30））

この日は朝からあいにくの小雨だったが，7:00からの朝食を各自で済ませた学生たちは8:20にほぼ全員がロビーに集合し（3名が2分程度遅刻），8:30にホテルの送迎車と鈴木氏の自家用車で三陸鉄道宮古駅へ向かった。同駅では予め申し込んでおいた団体乗車券を購入し，9:18の列車で宮古駅を発って田老駅には9:38に到着した。そこから最初の訪問地である田老第一中学校までは徒歩で15分程度であるが昨秋の下見の際には筆者の自家用車で訪問したため，筆者は前日に田老を訪問して徒歩での経路と所要時間を再確認しておいた。当日は雨が降っていたことや人数が30人に及ぶため隊列が縦長となり，全員が田老第一中学校に到着したのは10:05であった。

同校では校長の中屋 豊先生，同校用務員の琴畑喜美雄氏の出迎えを受け，校内の一室に設けられた津波被害展示施設「ボイジャー」見学をして，津波襲来時から唯一継続して同校で勤務している琴畑氏から説明をいただいた（写真2）。事前学習会の際，岩手県内の学校が津波襲来時に如何なる行動をとったのかは岩手県小学校長会（2012）を基にして説明しておいたが，その時とは比較できないほど学生たちの眼差しが真剣になっていたのは大きな収穫だった。また，震災後に同校が編集した記念誌『いのち』を買い求める学生も散見された。この記念誌は，津波被害を回顧した文集的な誌面構成になっているが，津波を回顧できないほど心に傷と衝撃を受けた生徒による津波に触れない文章も収録されており，津波が児童生徒に与える心的ストレスの大きさを実感できる。

見学を約50分で終え，10:55に田老第一中学校を辞した我われ一行は，徒歩で次の訪問地である田老漁協へ移動し，同地には11:05に着いた。ここで宮古観光文化交流協会「学ぶ防災」ガイドの元田久美子氏と会

い，そこで漁協付近の津波被害の説明を受けた後，津波襲来時の映像の上映がなされる「たろう観光ホテル」に至った。同ホテルは津波の強烈な営力で下層階が鉄骨だけの姿（写真3）を晒し，それを直視した学生たちは強い衝撃を受けたようである。我われは同ホテルの破壊が如何なるメカニズムで生じたのかの説明を受けてから最上階の旧客室に上がった。ここは津波襲来時に同ホテルの社長が津波の映像を撮影した部屋であり，ここに限定して上映される当該映像は決して出し惜しみではなく，リアリティ維持のためであるとの説明も得た。田老は数々の津波被害を受けてその教訓を語り継ぎ（岩手県下閉伊郡田老町：2005），防災施設を整えてきた（写真4）が，その精神は「学ぶ防災」や復興記録誌（特定非営利活動法人「立ち上がるぞ！宮古市田老」：2014）で後世へ継承れていくだろう。



写真2 琴畑喜美雄氏による津波レクチャー

同氏は被災時から継続勤務している唯一の職員で，最初に避難指示した方である。

（2017年8月10日，筆者撮影）



写真3 津波で破壊されたたろう観光ホテルの内部
床や壁が津波で破壊されたことが建物倒壊を助けたとの説明は印象的だった。

（2017年8月10日，筆者撮影）



写真4 たろう観光ホテル背後の津波避難路
両サイドがスロープとなった緩傾斜構造で安全性の確保を図っている。

（2017年8月10日，筆者撮影）

同ホテルを出た我われは、元田氏の案内で津波でも残った旧防潮堤の上に立った。そこからは建設途上にある高さを増した防潮堤も良く見えたが、この大防潮堤の完成時には旧堤防の上から海を眺めることはできなくなってしまう。旧堤防の上では元田氏から津波の恐怖や防災・減災教育の重要性が語られた(写真 5)。

その後、12:20 に元田氏と別れてから、我われ一行は宮古市役所田老支所まで徒歩で移動して 12:35 に全員が到着した。同支所には予め注文していた仕出し弁当が鈴木氏の助力（自家用車による宮古中心街からの配送）により届いており、我われは同支所の会議室で昼食を済ませた。ここで午後からの日程を改めて告知し、13:05 に田老支所を辞して徒歩で三陸鉄道田老駅に向かい、13:20 に同駅で全員の到着を確認して、田老駅発 13:30 の列車で宮古駅には 13:53 に到着した。その後、14:20 に宮古駅を発って宮古工業高校には 14:45 頃に着いた。バスに収容しきれなかった大学院生は鈴木氏の自家用車で移動した。

宮古工業高校は、前年 9 月に筆者が宮古市内フィールドの予備調査をした際、同校から近い宮古市立津軽石小學校で津波シミュレーターの実演を行っており、その時の縁で今回の現地実習でも筆者からシミュレーターの実演依頼をして、その代表者である同校実習助手の山野目弘先生から快諾をいただいており、当日も同校副校長の村上則文先生、生徒たちから大歓迎を受けることができた。事前の打ち合わせを経て訪問当日に生徒たちが実演してくれたシミュレーターは大変な力作で、津波が第二波や第三波になると勢力増長する様子を物理的かつ可視的に把握できた(写真 6)。また、津波を招来する海溝型（プレート型）地震に備えて、地上部の地形だけでなく海底地形までを再現した立体等高線模型は、津波の発生源となるトラフを知るうえで説得力に富むものだった。

宮古工業高校では生徒たちとも質疑応答ができ、防災・減災教育に関する多くの示唆が得られた。時の経過とともに徐々に薄れていく危機意識を如何に維持していくのが被災地にとって大きな課題であることが分かった。村上先生、山野目先生と生徒たちからの見送りを受けて我われ一行が同校を発ったのは 16:05 だった。宿舎には 16:20 に着いた。ロビーでは 18:00 まで休憩時間とするので入浴などを済ませておくよう指示するとともに、フィールドノートを提出させた。書き込み具合を個別にみて、筆者が担当している講義科目の「地理学概論」で説明している書き方が的確にできているかを精査し、成績評価の一助とするとともに、全般的にみた改善点を夕刻からのミーティングで説明するためである。

夕刻のミーティングは 18:30 から実施した。鈴木氏から若干のコメントをいただき、それに続けて筆者からはフィールドノートの返却と講評をおこなった。フィールドノートの書き方についてのコメントは次章で述べるが、一筆も記入できていない者が数名いたことは極めて残念である。

ミーティングに続けて、現地で大変お世話になった鈴木氏と娘さんの鈴木清華氏を招待して夕食兼コンパを催した。数名いた未成年者に対しては「絶対にアルコールを飲まない、飲ませない」を告げ、その他の学生に対しても「翌朝の出発が午前 8:00 であるため決して深酒をしない」旨を告げてから宴席を始めた。



写真 5 「学ぶ防災」ガイドの元田久美子氏による防潮堤上での説明
津波を語り継ぐことの深い意義にも言及がなされ多くの学びを得た。

(2017 年 8 月 10 日、筆者撮影)



写真 6 宮古工業高校での津波シミュレーター実演
同校では同様のシミュレーターを使って各地で実演を行ってきた。

(2017 年 8 月 10 日、筆者撮影)

3. 実習3日目（陸前高田市の天候：曇り，日中の最高気温：23.2℃（13:00））

この日は各自が朝食を摂ったのち荷物をまとめて午前7時45分にホテルロビーで集合し、駆けつけてくださった鈴木氏に見送られ8:00に借上げ大型バスで宿舍を発った。車内では3日目の課題（行程の中で印象に残った訪問地・見学地を順に3点あげ、第1位については選定理由を181～200字で添え書きする）の要領を配布した。この課題は翌日の午前10時までメール送信での提出を義務付けた。これは車中で居眠りさせないための工夫でもある。なお、この日はエクステンシブ型になるので、訪問地および簡潔な説明を各欄の「:」以下に列挙する。時刻表記については、二捨三入または七捨八入によって5分単位で記載している。

8:00 宿舍「ホテル近江屋」出発

8:30 「道の駅やまだ」（一時下車してトイレ休憩を10分間）：周辺の津波被害を駐車場の一面で説明

9:00 大槌町役場跡（一時停車して車中から）：町長はじめ多くの職員が津波の犠牲になったことを説明

9:08 釜石市鶴住居地区（一時停車して車中から）：「釜石の悲劇」とラグビーワールドカップ会場予定地の説明

9:15 釜石港周辺（徐行して車内より）：釜石市中心市街地の津波被害や原料立地型工業の製鉄業に関する説明

9:55 大船渡市街地（徐行して車中より）：大船渡市の津波防災計画と中心市街地の津波被害を説明

10:20 陸前高田市旧市街地周辺と「道の駅TAPIC45」跡（一時下車して施設見学とトイレ休憩を40分間）：岩手県内有数の被害状況と復興事業の説明とその実地把握（写真7）

11:10 陸前高田市の盛土による新市街地造成地（徐行して車中より）：TAPIC45で学んだことを復習的に説明

11:20 陸前高田市の高台の仮設住宅地（一時停車して車中から）：中学校校庭に残る仮設住宅の実態を説明

11:25 陸前高田市の仮設市役所（一時停車して車中から）：3階建てプレハブ構造の珍しい庁舎を説明

11:35 陸前高田市気仙中学校跡（一時停車して「奇跡の一本松」を遠望）：保存の是非をめぐる議論を説明

12:20 気仙沼市CREAみうら階上店（一時下車して昼食とトイレ休憩を45分間）：集合時間を告げて一時解散

13:40 南三陸さんさん商店街（一時下車して見学とトイレ休憩を20分間）：仮設店舗から恒久的商業施設として再移転した商店街を見学しつつ買い物

14:05 南三陸町役場跡を遠望する献花台（一時下車して慰霊献花と見学を15分間）：命を賭して防災無線放送を続けた女性職員と同地の津波被害と復興事業について説明

15:00 石巻市立大川小学校跡（一時下車して慰霊献花と見学を30分間，写真8）：学校防災の有事における難しさや葛藤についての復習（事前学習で受講生全員が精読した論文の復習）と津波の営力についての説明

15:50 「道の駅 上品（じょうぼん）の郷」（一時下車してトイレ休憩を約5分）：ここが最終訪問地

16:45 仙台市営地下鉄東西線荒井駅：3日間の現地実習を労い合って現地解散

以上の行程は、このコースの案内に習熟している岩手県交通のバス運転手2名のアドバイスを受けつつ筆者が最終判断して、当初立案していたコースを微調整した。本来は一時下車して説明した方が望ましい場所も多々ある。しかし、受講生の数が多いため時間節約を図る必要があった。また、南三陸町役場跡と石巻市立大川小学校跡における献花については、国立大学の授業であるため無宗教の慰霊としておこなった。献花用の花束と線香は、



写真7 陸前高田市の市街地に残る津波被害を受けた集合住宅

4階まで破損したアルミサッシやガラスが津波の高さを雄弁に語る。

（2017年8月11日，筆者撮影）



写真8 大川小学校跡での津波被害の観察

防災・減災教育を考えるうえで極めて大きな意味を持つ震災遺構である。

（2017年8月11日，筆者撮影）

昼食を摂った気仙沼のスーパーで筆者が私費で購入した。

運悪く3日目も天候には恵まれなかった。しかし、降雨がほとんどなかったのは幸いであった。事前学習会の折に「解散予定時刻は17時」としていたところ、1名の学生が解散地点である荒井駅を17:07に発つ地下鉄電車に乗ることを前提にして東北新幹線の指定席特急券を購入していた。そのため、最終行程の高速道路でバスを急がせることになってしまった。当該学生には行動時間に余裕を持たせる必要があることを注意しておいた。

IV. 各種提出物の内容からの考察

今回の授業では、おおむねシラバスに記載したアウトラインに従って成績を評価した。すなわち評価項目は、①事前教育における取組としての論文要旨の完成度、②フィールドノートの記載内容を中心とした現地実習での積極性、③解散後1日弱の時間内にメール送信で提出させた事後教育課題レポートの完成度、以上の3点である。以下の本章では、①～③のそれぞれから読み取れた特徴やブラッシュアップに向けての方策を順にまとめる。

1. 事前学習で提出させた論文要旨の特徴とその改善に向けての試み

ここで提出を求めた論文要旨は、別稿（香川：2018a, 2018b）における記載スタイルを整えるため、書誌情報に加えて約200字で論文内容を簡潔にまとめさせたものである。ここ数年の経験を踏まえれば、むやみに引用が多くなる長大なレポートを課しても大きな教育効果はほとんど見込めない。字数を極度に制限した要旨では、それよりも格段に内容把握の深さや正確さ、文章表現力を的確に測定できる。読み込みが丁寧で時間をかけてまとめられた論文要旨は、総じて内容を豊富に盛り込んでいながら無駄が省かれ、澁むことなく読むことができる。これが推敲を繰り返した成果であることは明白である。

対して表面的な内容把握に終始した論文要旨は、厳しい字数制限のもとで書かれていながら文章表現にキレが無く凡庸で、「水増し増量」的な読み難さを感じる。つまり「書いた」あるいは「表現した」文章ではなく、「書かされた」感を濃く滲ませた仕上がりになっている。

受講生から提出された論文要旨の評価は、提出が締切りに遅れたものは論外（この項目の成績評価は最低ランク）であるが、期日内に提出されたものは筆者が全てを精読し、それに続けて読み難さを感じる箇所の改善のための推敲作業に取り掛かる。これが事前学習会を終えてから現地配布用資料集（論文要旨集が中心となった地図を含むフィールドトリップ資料）を完成させるまでの筆者の仕事となる。膨大な時間を要するが、推敲作業の手数の多寡で上に記した要旨の水準が把握できる。幸いにも多くの論文要旨は相応の仕上がりが見られ、極めて質の低い論文要旨は稀である。

受講生は一人あたり複数の論文要旨をまとめる必要があるため、第一段階の成績評価では個人別ではなく対象論文別に要旨を評価する。その際、原著論文が簡潔な要旨を伴っているものについては、受講生がまとめた要旨と照合して引用度についても精査する。ごく一部を省いただけのものは高く評価できないが、原著論文の要旨よりも内容を的確に表現しているケースも珍しくない。対象論文別に要旨の評価を済ませてから、受講生各自が担当した全論文要旨の評価点を平均し、その序列に応じて論文要旨についての最終評価点を算出する。なお、論文要旨に関わる成績評価の段階の割合は、一般的なGPA評価を念頭に置いて調整している。

こうした一連の作業結果を30名近い個々の受講生にフィードバックするのは時間的にみて非常に難しい。そこで、筆者による推敲作業を経て完成させた上記の現地資料集の論文要旨と、当初に受講生が自ら提出した論文要旨との相違点を自己照合させることで、論文の「読み方」・「まとめ方」・「読解を通じて得た内容の伝達の仕方」などを間接的に指導している。ただ、個々の受講生が照合作業に励まなければ事後指導が行き渡らない難点もある。その改善を図るための方法を現在模索中である。

2. 現地で提出させたフィールドノートの特徴とその改善に向けての事後指導

今回は初めての試みとして、2日目のフィールドワーク（田老地区および宮古工業高校）を終えた宿舎到着後にフィールドノートを提出させた。これは初等・中等教育において頻繁に行われているノート提出に相当する取組である。そのヒントは教育実習の参観指導の折に得た。筆者は、教育学部の特徴を活用できた取組と考えてい

る。もちろん、この取組はフィールドワーク能力の向上と成績評価の精緻化を目指したものである。

奇数年に開講する「地理学研究」、偶数年開講の「地理学特講」において、現地フィールドでの授業への参加度や積極性を測定するのは非常に難しく、筆者は適切な方法を模索する試行錯誤を重ねてきた。今回は現地での観察や筆者からの説明に留まらず、現実に津波災害と対峙した人びとからレクチャーを受ける機会も多かったので、その内容を如何に備忘録として残しているのかを通じて、授業への参加度と積極性の測定を試みた。なお「地理学研究」と「地理学特講」はともに2回生以上に前期集中で配置されている科目なので、ごく一部の受講生を除いてほぼ全員が「地理学概論」（2回生前期配当）でフィールドノートの役割や書き方を学習済みである。

初めての試みであり、フィールドノートは2日目の宿舎帰着後すぐに告知すると同時に回収した。予め告知しなかったのは、フィールドノートだけを与えて受講生に自主的使用を促した場合の書き込み具合を知りたかったためである。次年度からはシラバスに明記する予定なので、相応の覚悟を決めた者だけが受講登録してくると予測できる。

フィールドノートへの記入状況を精査すると、第1日目夕刻の鈴木氏のレクチャー内容を整理して記入できていた者はおよそ半数で、メモ程度の者が全体の約4分の1、全く記していない者が同じく全体の約4分の1いた。携帯電話やスマートフォンに記録している者が皆無とはいえないだろうが、手元にあるフィールドノートにメモすらできていない者がデバイスに入力するとも思えないので、上記の数値は決して褒められたものではない。

さらに第2日目のフィールドワークで得た説明や観察の記録を調べると、ここでも全く無記入の者と遅れて提出した者（つまりフィールドワークにフィールドノートを持参しなかった者）がわずかに数名ながらいいた。地理学のフィールドトリップを物見遊山的なものと誤解している恐れもある。受講生の多くは将来何らかの校種で教員になることを希望している。そうした彼ら/彼女らが、社会科の内容の大半が地理的観点に立っている小学校、社会科地理的分野が必修の中学校、次回の学習指導要領施行で「地理総合」が必修化される高等学校などの教諭を目指すのであれば、最も身近で奥が深い地域調査について一層真摯に取り組んで欲しいものである。

他方、かなり詳しく記入できたい者についてみると、そつなく記入できていても記された文字が丁寧過ぎて周辺の状況観察にまで十二分な時間を配分できていないことが懸念されるケースもあった。また、昼食直前や同日最後の訪問地（宮古工業高校）での経験のメモが絶対的に不足しているケースも散見された。これらの問題点に関しては、フィールドノートを受講生に返却した第2日目のミーティングの際、①フィールドノートは『地理学概論』の授業で説明した通り備忘録なので自身が読める文字であれば字は汚くても問題ない、②説明板の文字を筆写するくらいなら写真で撮影しておいて周辺観察に励んで感想を書き残す方が良い、③今回は宿舎帰着後直ぐに回収したが、本来ならば宿舎に戻ったら記憶が新しい食事前のある程度の清書を済ませておいた方が良い、これら3点を軸にコメントを与え、フィールドノートの効率的な使い方としてフィードバックした。

3. 解散翌日に期限を設けて提出させた事後教育課題レポートの特徴からみた現地指導のあり方

本節では、実習3日目の朝にバス車中で配布した課題の内容をもとにして、特にエクステンシブ的な移動を伴う現地実習の指導について、そのあり方を考察する。

当課題の回答内容は、行程の中で印象に残った見学ポイントを1～3位まで順に並べたもの、および第1位の地点について181～200字で書かせた選定理由からなる。課題提出期日は、現地解散翌日の午前10時としたが、提出時間に遅れた者はいなかった。回答結果を集計したのが表1である。

回答が得られた地点を1～3位で総括すると、その地点数は6か所となった。これらには、表1に示すとおり、バスを路肩などに一時停車させて車内から解説した地点と、バスを駐車場のうへ全員が一時下車して観察や説明をおこなった地点がある。

まず1位回答に着目すると、地点数は3か所に限られ、15名が大川小学校跡、12名が陸前高田市街地を挙げた。他では南三陸町市街地が2名から選ばれた。1位回答で選ばれた地点は、下車のうへ解説を施したという共通項がある。滞在時間が相対的に長かったため、それが強い印象を残すことにつながったと考えられる。

次に2位回答を得た地点は、ほぼ1位回答と同様の傾向を示している。つまり、回答数では陸前高田市街地と大川小学校跡が拮抗しており、それに南三陸町市街地が続く。1名が挙げた大槌町旧庁舎は車中から解説した地点だったが、震災遺構として残っている建物が余りに無残な姿であるために印象を残したのであろう。

少し回答が散らばったものの、陸前高田市街地は多くの受講生に挙げられた。これに対して大川小学校跡は 3 位回答に限れば回答数が少なく、逆に南三陸町市街地は 10 人からの回答を集めた。後者では嵩上げ市街地に設けられた「さんさん商店街」という施設で休憩と買い物のための時間も確保したため、町役場跡を望む献花台と共に受講生が強い印象を受けたと考えられる。また、1 位回答と 2 位回答では挙げられなかった釜石市鶴住居地区と BRT が、それぞれ 1 件の回答を得た。前者は台風による洪水や土砂崩れに備えた避難場所へ周辺居住者が殺到し、そこを津波が襲って多くの死者・行方不明者や負傷者を出した「釜石の悲劇」の現場でもあり、2019 年ラグビーワールドカップの競技場が建設される場所でもある。大川小学校跡とともに、僅かな判断ミスが甚大な被害を招来するという反面教師的な事例として教訓の舞台となり得よう。被災地に限らず維持管理コストの面から今後の発展や普及が見込まれる BRT は、近未来の交通システムとして大いに注目できるため、僅か 1 件の回答しか得られなかったのは少々残念である。

表 1 の注 7) で説明した方法で算出した加重得点に着目すると、1 位回答を得た 3 か所が相対的に高得点を得た。ここでも陸前高田市街地と大川小学校が拮抗して高い数値を示している。南三陸町市街地も決して低い数値ではない。こうした傾向から、下車して解説することの大切さが改めて分かる。

表 1 実習3日目の課題における回答地点と加重得点

回答を得た地点	見学方法	1 位回答	2 位回答	3 位回答	加重得点 注 7)
大槌町旧庁舎 注 1)	車中	—	1	2	4
釜石市鶴住居地区 注 2)	車中	—	—	1	1
陸前高田市街地 注 3)	下車	12	11	13	71
BRT 注 4)	車中	—	—	1	1
南三陸町市街地 注 5)	下車	2	7	10	30
石巻市立大川小学校跡 注 6)	下車	15	10	2	67

(受講生より提出されたレポートの集計による)

注 1) 旧庁舎の前にバスを一時停車させて車中より被災状況について解説した。

注 2) 山田線鶴住居駅を遠望する地点でバスを一時停車させて被災状況について解説した。

注 3) 市街地では旧「道の駅タビック 45」で下車して施設見学、嵩上げ市街地と仮設住宅で車中から被災後の復興について解説した。また「奇跡の一本松」については、これを遠望できる地点でバスを一時停車させて保存活動について説明した。当欄はこれらの総計である。

注 4) BRT (Bus Rapid Transit=バス高速輸送システム) は東日本大震災で被災して不通となった大船渡線と気仙沼線の一部区間をバス輸送で代替したシステムで、鉄道輸送時代よりも頻度の高いサービスが実現されている。今回の現地行動では車中から車両が眺められた地点、BRT 専用道路との交差点で輸送システムについての解説をした。

注 5) 避難放送を続けた女性職員が亡くなった町役場 (防災庁舎) を望む献花台、嵩上げ市街地にある「さんさん商店街」でバスから下車して解説を行った。当欄はこれらの総計である。

注 6) 被災当時の校舎がほぼそのまま残されている小学校跡地で献花と解説を行った。

注 7) 1 位回答を 3 点、2 位回答を 2 点、3 位回答を 1 点として回答件数を乗じて算出した。

V. 成績評価を含めた全体総括—結びに代えて—

GPA 制度の導入が遅れている本学にあって、筆者は約 10 年前から GPA を意識した成績評価に努めている。対象となる科目は、受講生が概ね 30 名以上の科目であり、今回の「地理学研究」も該当する。現地行動を共同実施している大学院の「人文地理学特論」は GPA 評価対象外であるが、それだけで成績分布を示すと他の受講生の成績が分かってしまうことがあるため、次に列挙する成績分布では学部科目と合算して表記している。

今回の成績評価の内訳は、秀 (90 点以上) 3 名、優 (80 点台) 13 名、良 (70 点台) 5 名、可 (60 点台) 8 名、不可 (59 点未満) 0 名である。評価の素材は、前章の冒頭に記した通りである。

昨年度と同様に評価「秀」となった受講生は、総じて文献要旨のまとめに優れており、フィールドノートやレ

ポートが観察力と追究力に満ちていた者である。評価「優」を得た受講生は、いずれかの課題で甘さが見られたものの相応の観察力や追究力を感じさせてくれた者である。評価「良」の受講生は、各所に甘さが残っているものの、各評価項目とも著しく見劣りすることが少なかった者である。最後に評価が「可」であった受講生は、提出物の多くに甘さが残り、現地フィールドにおいて集合時間に遅れたり、フィールドノートを活用していないなどの怠惰さが目立った者である。

現地実習を伴う当科目のような授業では、数日にわたって寝食を共にするため、GPAを意識した冷徹な評価が難しい。しかし、受講生が30名前後に及べば、今後も成績評価の厳正さを維持するためにGPAに対応可能な成績評価を心掛けていきたい。

付 記

本稿に掲載した写真は、すべて関係者からの使用許諾を得ています。また、本授業科目の実施、および本稿の作成にあたり、宮古容器株式会社代表取締役の鈴木清次郎氏、宮古市立田老第一中学校校長の中屋 豊先生、同校用務員の琴畑喜美雄氏、宮古観光文化交流協会「学ぶ防災」ガイドの元田久美子氏、宮古市役所田老支所の皆様、岩手県立宮古工業高等学校副校長の村上則文先生、同校実習助手の山野目弘先生および生徒の皆様、宮古から仙台までの長距離移動で大変お世話になった岩手県交通のバス運転手の方々、以上の皆様には、ひとかたならぬご支援とご配慮を賜りました。末筆ながら記して厚く御礼申し上げます。

本研究の一部には科学研究費基金（基盤研究(C)）「地震被災地の経験に立脚した震災復興策と防災・減災教育の地域間共有の促進」（課題番号：16K03189、研究代表者：香川貴志）を使用し、成果の一部を2017年11月25日に上海師範大学で開催された、第7届中日国際学術検討会「区域創新・産学研合作」（第7回中日国際セミナー「地域イノベーションと産学官連携」）において発表しました。

本稿の本文脱稿後、筆者が顧問を務めている京都教育大学体育会ラグビー部主将の田畑晃輔さんが秋季リーグ試合中の事故で不幸にも夭逝されました。当科目「地理学研究」を受講し、現地実習の際も真剣に学んでいた彼の冥福を衷心より祈り、ささやかながら本稿を田畑晃輔さんの霊前に捧げます。

参 考 文 献

*事前学習会で扱った対象地域に関わる79編の文献については、下記の香川（2018a, 2018b）を参照のこと。当欄にはそれ以外の文献を掲出した。

岩手県小学校長会（2012）『2011.3.11 東日本大震災の記録 未来を信じて いま歩き始める』

岩手県下閉伊郡田老町（2005）『地域ガイド 津波と防災～語り継ぐ体験』。

重茂漁業協同組合（2016）『東日本大震災の記録 天恵戒驕の系譜』。

香川貴志（2013）「東日本大震災を受けての防災教育普及の取組—さまざまな論考の整理と三陸地域での現地検証—」，京都教育大学紀要，123，pp.31-45。

香川貴志（2016）「三陸被災地に立って思う」，桃山歴史・地理，52，pp.1-2。

香川貴志（2017a）「『まち』の再活性化を学ぶ—飛騨古川，高山，富山における2016（平成28）年度『地理学特講』の覚え書き—」，京都教育大学紀要，17，pp.1-10。

香川貴志（2017b）「飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習会の記録（第1報）—飛騨古川地区と富山市街地について—」，京都教育大学環境教育研究年報，25，pp.29-41。

香川貴志（2017c）「飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習会の記録（第2報）—高山市について—」，京都教育大学環境教育研究年報，25，pp.43-60。

香川貴志（2018a）「三陸被災地で防災・減災教育を学ぶ—その事前学習における文献研究—（第1報）」，京都教育大学環境教育研究年報，26，pp.25-37。

香川貴志（2018b）「三陸被災地で防災・減災教育を学ぶ—その事前学習における文献研究—（第2報）」，京都教育大学環境教育研究年報，26，pp.39-46。

特定非営利活動法人「立ち上がるぞ！宮古市田老」（2014）『田老 2011.3.11 東日本大震災から3年』。